

住宅地に於ける景観の相貌と変容その6

- 「しつらえ」の記号的意味に関する考察 -

0. 目的

筆者はこれまで、家の顔（ファサード）や街路景観の問題を各家の「しつらえ」行為の問題にすりかえて研究・考察を進めてきた。しかし、「なぜ、人はしつらえるのか」、「しつらえにはどういった意味が込められてきたのか」といったもっと根源的な疑問には、あえては言及せずにごこまできてしまった。今回は、イギリス滞在中に日本との比較の上で考察・抽出を試みた、住宅表層に出現する要素の成立要因をここで纏めようと思い立った。考察方法は、両国の住宅表層に現れてきている要素の予想される存在理由を考察し、項目別に整理するものである。景観は受けて側の印象を研究対象とすることが多かったが、作り手側の観点から分かることを整理するという基本姿勢はここでも貫かれている。

1. コミュニティに対するメッセージ伝達

①近隣への従属意識を表現

- ・近隣に対して寄与・気づかっているという表現
- 公共街路側を気配り（庭の手入れ、窓辺の装飾）
- 公共街路側を清掃（護美を拾う、水をまく）
- 建物の高さや壁面の位置・デザインを隣に揃える

②独立・独自性を主張する

- ・近隣と自分とは違うことを表現する
- 家の色や表面のテクスチャーをあえて変える
- 目立たせる、高価に見せる、個性あるものとする
- クローズタイプの建築構成をとる

2. 本来的人間行為

①プライバシーを保護する

- 遮蔽物によって視線を遮る

②自分のテリトリーや所有地を明示する

- 囲いや生垣で所有地を囲い境界を明示する

3. 文化的に継承される表現要素

以上の表現は個々を注意深く眺めると独自性があるものの、国と国との比較によりグローバルに眺めると

似通った表現があることに気付かされる。それはまったく文化的にまたは慣例的に継承されている表現要素と定義づけが可能であろう。

①歴史的な空間継承

— 庭空間の構成：日本は「まげ」や「ひき」を用いた数寄屋や門構え等から発祥した空間構成を用いて、顧客を迎えたり街路を演出するといったしつらえを行う。それに対してイギリスの庭構成は街路へ解放しファサードと一体となって街路空間に寄与する姿勢が強い。顧客の出迎えは玄関、ホールが主要空間となり、庭の手入れはコミュニティへの追従意識の判断材料とされることもある。

— ファサードの構成：日本は上述したように庭空間により街路と接しているケースが多く、顔は庭や門、屋根の構成等で表現される。イギリスでは建物立面上に装飾やシンメトリー、3段構成等を用いて様式を表現することにより顔となすものが多い。それはあたかもキャンパス的である。

— 街路への接し方：日本は通りに対して植栽や囲い等の視覚的緩衝帯を形成する比較的クローズタイプが顕著であるが、イギリスではドアや窓を直接街路に接し、解放しているタイプが顕著である。それは、日本の場合には本来平屋建てが基本となっており、公私の生活が地上レベルで混在していた為、また、建物の構造上、遮音性能に劣っている為街路との分離が望まれたと解釈できる。一方、イギリスでは、地上レベルが公的生活、2階で私的生活の形態が基本となっていたために街路と比較的一体的な形態が発達継承されることとなったのであろう。（日本の路地タイプの住宅地では公私の状況が変化し、逆にオープンタイプとなる）

②サブ・カルチャー的継承

— 比較的局所的、一時的な継承で、近隣に即時的に習うことによって生じる継承また、工業化社会でパーツ生産により普及するような継承、住宅の商業化・バ

ソフット化等によって踏襲される操作された継承等

③宗教的継承

—中国の風水理論からくるような宗教的な慣例から決定される要素等

4. 環境要因からの影響

①物理環境的要因

—その土地の気候・風土、流通機構、社会経済状況、個人的経済状況、地形、土地面積・形、方位、等

②都市政策環境的要因

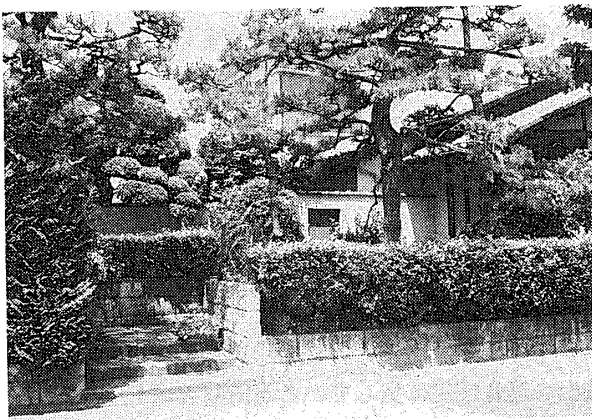
—建築法規、都市法規、地区計画、地域計画、整備計画、等の内容からも結果的にある部分が決定される

5. まとめ

以上のように表層の要素決定に関わる価値概念に着目して抽出を試みたが、以下では、それらの要因が生じたもっと根源的な要因を人の本性に着目して考察し纏めとしたい。

①人は何の為に生まれてきたか。「表現する為に」とルイス・カーンは述べた。人が物を作り出す時には常に自分を表現してしまうという宿命を負うと共に、そ

れは自己存在の証としての念が込められる。また、表現は他人に対して行うことであり、他と自分との関係の中で自己を確立するのが人である。②人と大環境である自然と対峙していた時分から、人が物を作りだし人対物へと変化するようになってから、ひとつの重要な概念が生まれた。それは所有するという概念である。大自然と対峙している間にはそれを個人が所有することはまったく念頭にも登らなかったことは想像に固くない。しかし、物は人が作りだし、その瞬間から人に所属する性格のものであった。③人は人から学んだり人を真似たりすることにより文化を発展させてきた。それは、人の表現物(言葉や物)が人の判断材料となっている証拠であろう。(動物はもっぱら肉体的なものが個体の判断材料となる)④共通目的意識が生じるようになってきてから同目的の人が住まう集団または都市を形成することとなった。そこには集団を統制する必要が生じた。(単体規制・集団規制等)
※日本・イギリスと称する比較対象となった住宅は、都市部、及び近代の住宅。



日本の代表的表層のしつらえ

- ・建物が見えない程閉鎖的(プライバシー保護・専有領域明示)
 - ・アプローチ路の演出(個の主張)
 - ・緑による街路演出(コミュニティへの表示)
- (その1、2で表層空間が縮小し、演出行為が減少しながらも型として残存し続けていることを指摘した)

以上のように両者から同様な目的が読み取れるのは、それらの行為が根源的であること、手法に差があるのは文化・歴史の相違であろう。



イギリスの代表的表層のしつらえ

- ・各戸の色を変えてペイントしてある(個別性の主張)
- ・窓辺の植物・物による展示(コミュニティへの意志表示)
- ・囲いがある(専有領域の明示)

文 献

- (1) 渡辺治、高橋憲志：「住宅地に於ける景観の相貌と変容—世田谷区の住宅整備のための考察—」昭和62年日本建築学会大会学術講演梗概集
- (2) 渡辺治、高橋憲志：「住宅地に於ける景観の相貌と変容その2—都市住宅の型形成の爲の一考察—」昭和63年日本建築学会大会学術講演梗概集
- (3) 渡辺治、高橋憲志：「住宅地に於ける景観の相貌と変容その3—駅前商店街の形成と住宅地に対する影響に関する考察—」平成元年日本建築学会大会学術講演梗概集
- (4) 渡辺治、高橋憲志：「住宅地に於ける景観の相貌と変容その4—住宅地の街路特性に関する考察—」平成2年日本建築学会大会学術講演梗概集
- (5) 渡辺治：「住宅地に於ける景観の相貌と変容その5—計画場による空間理解と整備に関する考察—」平成3年日本建築学会大会学術講演梗概集

*千葉工業大学非常勤講師・工博